

みのの EDO

東京⇄笠原情報誌 MAIL版



アーティスト・鷲尾友公さんとコラボレーションしたタイルキューブ。



2022年4月12日

タイル名称統一100周年!

建物を覆うやきものの呼称が「タイル」と統一されたのは1922年4月12日。今年はその100周年となることを記念し、様々なイベントを開催。4～5月に、多治見(岐阜県)や常滑(愛知県)、東京、大阪で開催されたイベントや関連企画展の様子をレポートする。



台湾屋台は行列する人気ぶり。

タイルメーカー各社が制作したテーブルとベンチ。



タイル看板の表彰式。

4月16・17 美濃焼タイル祭&台湾食堂
多治見駅北広場/笠原

多治見駅北口を降りると、台湾屋台の赤と黄色、タイルの様々な色が、カラフルな空間をつくりあげていた。

今回のイベントはタイル名称統一100周年を記念し、昨年好評を博した「笠原タイル祭&台湾食堂」をパワーアップして開催。会場には、タイルメーカーや地元の陶芸作家による出店のほか、台湾屋台や地元のお店による飲食の販売なども行われ、約25のブースが並んだ。

会場中央に設置されたタイルテーブルとベンチで台湾フードなどを楽しむ人も多く、コロナ前のような賑わいを見せた。

「土岐川堤防タイルアート」のワークショップでは、多治見市を流れる土岐川の

堤防を飾るモザイク作品を制作。参加者は30cm四方の貼板に、50角(5cm)のタイルを図柄どおりに配置して作品を完成させた。17日の昼過ぎには予定枚数が終了するという人気ぶり。

笠原会場は17日のみの開催。当日は多治見駅北広場会場と笠原会場間で、シャトルバスを運行。多治見会場発の午後一番のバスは、タイルファンらしき女性グループや家族連れを乗せて満員で出発し、約20分で笠原会場の多治見市モザイクタイルミュージアムに到着した。

できたての台湾ぎょうざ。



「土岐川堤防タイルアート」のワークショップ。

笠原会場では、ミュージアムの前にずらりと並ぶ様々なタイル看板に出迎えられた。

会場では、タイル製造工程を伝える展示や、釉薬を用いたワークショップ、タイルシンの施工実演、タイルを使ったゲームなど、まさにタイル尽くし。近隣のタイル工場を見学する「オープンファクトリー」は早々に満員御礼となった。

午後は小雨に見舞われながらも、15時からタイル看板の上位者への表彰式を開催。イベントが締めくくられた。

多治見 会場



陶芸作家・中川夕花里さんによるタイル模様のマグカップ。



美濃焼タイル女子会によるブース。タイル雑貨の販売とワークショップが行われた。

陶芸作家・小平健一さんによる手作りのタイル。



笠原会場



砂の中に隠れたタイルを探すゲーム。

タイルシンの中に泳ぐタイル金魚を釣る「金魚釣り」。

タイル金魚などが当たり、人気を博したタイルガチャ。



タイル看板で 多治見の町を盛り上げる！

ミュージアム前に並んだタイル看板は、「タイル名称統一100周年」を記念し、岐阜県内のタイル関連企業や多治見市内の店舗などによって制作されたもの。表面上部の100周年ロゴマークタイルは共通で、下部分と裏面は自由にデザイン。現在99台が制作されている（複数制作した企業もあり）。

今後は各企業、店舗に飾られる予定。タイル看板をめぐる街歩きも楽しそう。

表彰式では
タイルトロフィーを
贈呈！



来場者による投票で、
人気を集めたタイル看板。

1位
山周
セラミック



2位
作善堂



看板のサイズは
横30cm×縦60cm



MINO SOIL 第2回 エキシビション 「Trans-figuration of Clay」

美濃地方の土の可能性を、
デザインを通じて発信するブランド・MINO SOIL。
第2回のエキシビションがKarimoku Commons Gallery
(東京都港区西麻布)にて開催された。

岐阜県美濃地方は、タイルから食器や陶器作品まで、多岐にわたる陶磁器の産地として知られる。その背景には、地球誕生の歴史とともに数百万年をかけてつくられた豊かな土がある。

そうした美濃地方の土の可能性を発信すべく、多治見のタイルメーカー・エクシズ、食器の専門商社・井澤コーポレーションによって立ち上げられたMINO SOIL。全3回のエキシビションを予定し、昨年2021年6月に開催した第1回では、「土」「鉱山」をテーマに据え、スタジオ・ムンバイとコラボレーション。様々な種類の原土や、鉱山の写真を展示し、土そのものの美しさや魅力を伝えた。

第2回となる今回は7組の国内外のデザイナーが美濃の土を用いて作品を制作。作品は木製の作業台の上に置かれ、この場で完成したばかりのような印象をもたせる。

作品制作では、「タタラ機」「押出成形」「鑄込み」といった昔ながらの機械や成形方法を用いている。釉薬を使わず(着色せず)、色は焼成して生じたものであるという。

土とデザイナーの共同作業が生み出したといえる作品たちは、デザイン性がありながら気取りなく、土の野性味と力強さを併せ持っていた。

第3回目のエキシビションは来年3月を予定。今回の成果をさらに展開させ、用途に幅をもたせたプロダクトを完成させる予定だ。



長坂 常/子は鏝(かすがい)

性質の異なる2種類の原土の間に、双方を混ぜ合わせて団子状にしたものを置き、タタラ機でプレスし合体。7種類の原土を組み合わせて、どんな変化が起こるかを試した作品。作品名は、混合土が「鏝」となって原土同士を結びつけることから。

*タタラ機:粘土をプレスしてタタラ(板状)にする機械。

藤城 成貴/Baskets

押出成形でつくった円柱を、手作業で編んだ作品。

*押出成形:金型を通し、ところんのように押し出して成形する方法。



リナ・ゴットメ/Vases, Tray

ミクロで見た土の構造や地層からヒントを得て、「層(レイヤー)」をキーワードとした作品。



カネ利陶料/Vases

ベースとなる土の上に、異なる種類の土を載せて、一枚にした生地を使用。2種類の土の焼成後の収縮率の違いにより、表面にひびわれを生じさせた。



工場で使用する作業台を作品の展示に利用(上)。
ギャラリー入り口近くに置かれた美濃の土のかたまりが存在感を放つ(右)。



タイル名称統一100周年記念 巡回企画展

日本のタイル100年 —美と用のあゆみ

3館を巡回する企画展は常滑からスタート。4月12日の「タイルの日」には藤森照信さん、若林亮さんをゲストに迎えたシンポジウム「タイルのこれまでとこれから」をオンラインで開催。常滑市の新市庁舎を設計した若林さんは、市民参加で製作したタイルや陶芸作家が手掛けた陶壁について紹介。常滑の新たな名所になりそうだ。

企画展は歴史に沿って進む構成で、名称統一以前の敷瓦やマジョリカタイルの展示から始まる。その先には威風堂々とした洋風建築の姿が。この「タイル館」は1922年に開催した「平和記念東京博覧会」で特設館として建設。当時流入しつつあった欧米の生活様式におけるタイルの可能性を示すべく、最新の製品が張られていたという。

この博覧会を契機に名称が「タイル」に統一され、展示空間もここから拡大。美術タイルとともに水まわりの白いタイルが並び、「美と用」に応えたその多様さを実感させる。最後は二人の建築家が考案し、LIXILやきもの工房で製作した「夢のタイル」を紹介。ライブミュージアムならではの締めくくりとした。

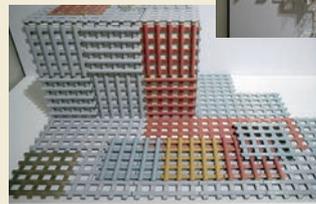


関連書籍も発売中。



奥に見えるのが「タイル館」。残念ながら内部の写真は残されていない。右側は東京博覧会の全景を描いた鳥瞰図。

「からまりタイル」
平田晃久さん考案



「1未満タイル」板坂留五さん考案

特集展示 タイルとおおさか

—日本における「タイル」名称統一100周年—

大阪近辺の建物の建築部材を収集してきた大阪歴史博物館。今回の展示はタイル関係の所蔵品がまとめて披露される貴重な機会となった。展示は第1章「建築材料としてのやきもの」、第2章「近代建築を彩るタイル」、第3章「建築家・中村順平と壁面設計」の三部構成。

第2章では、阪急百貨店やダイビル、生駒ビルディングなど、大阪でよく知られた建物の外装タイルやテラコッタが勢ぞろい。一見、シンプルな外装タイルも、解説により製法や形状などを知るにつれ、存在感が増してくる。これらの建物は幸いにもほとんどが現存、もしくは一部保存がされており、現在の建物の姿とつなげて見られることが嬉しい。

また、目をひいたのが額縁に収められたタイル。校舎の解体の際に関係者に配られたものといい、建物やタイルへの思い入れが感じられた。

展示品の一つひとつから、大阪のタイルのありようが伺い知れる展示となった。



写真中央・近鉄百貨店 阿倍野店 外装タイル(塔屋)／昭和12年(1937)



大阪府立北野高等学校 玄関ホールタイル／昭和5年(1930年)
校舎の解体時に、タイルが額装されて関係者に配られた。大阪では一流の建築家が学校校舎の設計を担ったこともあり、校舎に思い入れを持つ卒業生も多いという。



山口銀行旧名古屋支店モザイクタイル壁片(従者)／昭和41年(1966)
第3章では、昨年解体された山口銀行名古屋支店を飾っていたモザイク壁画「城を築く」の一部を展示。

公開トークイベント・全国巡回展

佐藤卓氏 × 木野謙氏

(グラフィックデザイナー)

(全国タイル工業組合理事長)

A VISION OF TILE FOR THE NEXT 100 YEARS

—次の100年に向かって

トップクリエイターと、タイルの作り手が考える「未来のタイル」とは？
名称統一100周年を記念した公開トークイベントが、
東京・蔦屋家電で開催された。



佐藤卓氏

商品のパッケージデザインから企画まで幅広く活躍。美濃焼のブランディングも手掛ける。



木野謙氏

株式会社LIXILでタイルの商品企画やプロモーションを中心とした業務に携わる。

■4000年の歴史

会場は二子玉川 蔦屋家電(東京都世田谷区)の2階イベントスペース。トークは17時に開始した。

まず木野さんが日本におけるタイルの歴史について解説。「タイルは『覆う』を語源とし、建築を覆う焼き物を称しています。起源は古くて4000年くらい前、エジプトの王様のお墓の装飾に使われました」

日本には4つのルートで伝わり、「敷瓦」「化粧煉瓦」など25個の呼び名が存在していたが、1922年4月12日、全国のタイル業者により「タイル」と名称が統一された。当初は装飾を目的に使われたが、しだいに衛生面や耐久性が注目される。1921年のスペイン風邪の流行を機に衛生目的で使われるようになり、また、その2年後に起きた関東大震災により鉄筋コンクリート造の建物が増加、その外壁がタイルで覆われるようになった。

■宝物みたいなタイルを拾う

佐藤さんはタイルとの出会いについて聞かれ、子どもの頃の2つのエピソードを披露。

「小さい頃、お風呂はまだ薪で焚いていました。木の桶だったのが、家の改装でタイルになりました。それはそれは、おしゃれで。お風呂場の景色が一変して衝撃的でした」

「当時は空き地がたくさんあって走り回って遊んでいました。あるとき、そこにすごくきれいなタイルが捨てられていたんです。勾玉みたいな形でいろんな色がグラデーションになっていました。宝物みたいに思えていっぱい拾ってきたことをよく覚えています」

つい最近の出来事のようにいきいきと語られ、当時の驚きが伝わってきた。

■手作業が生み出すもの

続いて、佐藤さんがクリエイティブ・ディレクターを務めた松屋銀座の創業150周年のプロジェクトの話題に。その一環で行われた地下鉄通路の改装ではタイルを全面に使用。要所要所が職人により細かく割られたタイルで仕上げられている。

「手技が入ることで、壁全体の見え方が変わります。有機的な線が入ることで、タイルの魅力が増すように感じています」と佐藤さんは力を込める。

技術が進歩し、今は色や形が均一のタイルが製造できる。すると反対に昔のようなゆがみや色ムラが魅力的に見えてくる、と佐藤さん。「テクノロジーを用いて、あえてゆがみや色ムラを出すことができれば面白いのではないか」という投げ掛けに、木野さんが応じる。「昭和のビルにはタイルが使われていて、職人さんが手掛けたおさまりもすごくきれいです。それを壊すのではなく生かす際に、テクノロジーを用いて新しい試みができないかと常々思っていました。今の話を聞いて、この方向性は正しいと確信しました」。

■タイルの価値を高めたい

一方で、タイルの需要は最盛期の7分の1まで減少。ユニットバスの登場など、その背景は様々あるが、木野さんは希望を見出している。

「今、タイルの本質的な価値に世の中が気づきはじめています。マーケットを広げるといふより、タイルの価値を高めたい。この一年間は様々な人



左から木野さん、佐藤さん、司会・横里 隆さん。

たちと、どんなイノベーションを生み出せるかを考えていきたいですね」と意欲を語った。

佐藤さんはデザイナーならではのアプローチを計画している。「2001年から“デザインの解剖」というプロジェクトを行っています。タイルなら例えば色がどう人に届くか、どうムラが出ているかを分析する。それによってタイルを見る視点が生まれます。町を歩いていてタイルが気になって仕方がないという人が増えると、必然的にタイルの豊かな空間づくりにつながると思います」。

■サステナブルな建材として

会場からはカーボンニュートラルについて業界はどう向き合うべきか、と質問が寄せられた。

「窯業系の商品は焼成の際にCO₂を排出しますが、商品のライフサイクルで考えると排出量は少ないのです。それを業界として伝えていく必要があります。焼かないでつくるタイルができればサステナブルな素材になりますが、それを次の100年で考えていきたいです」と木野さんが回答。

佐藤さんからはこんなエールが送られた。「タイルは耐久性があるので、長年使っていく、リユースしていく。そういう技術が登場するのを期待したいと思います」

約1時間30分のトークは幅広く展開。佐藤さんの子どもの頃の思い出を含め、タイルにまつわる話題の豊富さを実感。登場した様々なアイデアが実現する未来を思い描いた。

トークイベントの様子は、
公式YouTubeチャンネルにてアーカイブ配信中



<https://www.youtube.com/watch?v=eLFqWvNn2po>



全国主要都市 蔦屋書店巡回展



タイルのセレクトショップ“TOUCH THE TILES”が全国の蔦屋書店を巡回。100周年記念ビジュアルブックやタイルの関連書籍、アーティストコラボグッズ、タイル雑貨、アクセサリーなどを揃え、名称統一100周年をPRする。

巡回
予定

東京・代官山 蔦屋書店 6月6日(月)～19日(日) (終了)

大阪・梅田 蔦屋書店 6月27日(月)～7月10日(日)

福岡・六本松 蔦屋書店 開催日未定

北海道・函館 蔦屋書店 開催日未定

※愛知県名古屋市、岐阜県多治見市でも開催予定。



東京メトロ銀座線 銀座駅地下通路



2019年に創業150周年を迎えた松屋銀座。佐藤さんはそのプロジェクトでクリエイティブ・ディレクターに就任。松屋に通じる銀座線の地下鉄通路の改修をデザインした。「銀座は歴史がある街です。伝統的な味わいのあるタイルを使い、洗練された空間でありながら人間味がある地下通路にしたい、と熱くプレゼンしました」(佐藤さん)。説得力のある内容で無事、了承が得られた。



壁面には表面にゆらぎがあるオリジナルのタイルを使用している。



柱の数字や「MATSUYA DESIGN」のロゴは職人が手作業でタイルを割って制作している。

隠し絵を探す楽しみも。



「タイルでつくと簡単には変えられない。松屋はデザインで生きていくと、宣言することになるわけです」(佐藤さん)



「みんなのタイル図鑑」制作のためのクラウドファンディング開始

〈タイル名称統一100周年記念事業〉「みんなのタイル図鑑」制作

CROWDFUNDING PROJECT

タイルの魅力発信とタイルを通じた多治見市への来訪者増加が目的。

公開期間 2022 6.11 sat ▶ 7.31 sun

目標金額 1,500,000 円 ※募資金額次第で発行部数変動あり

- 返礼品：「みんなのタイル図鑑」 B5サイズ冊子
ブックカバーの表紙をご自身でデザインするタイル付のクラフトセット。タイルの歴史、製造工程や種類などの豆知識などを掲載。



PROJECT CONCEPT

あなたが作るオリジナル本 「みんなのタイル図鑑」を完成させよう

一般の方から送られてきた身近なタイルの写真を生かし、読者の生活環境にあるタイルに目を向けていただける内容です。タイルの種類、作り方、歴史を簡潔に示すことで、タイルに関心のない方も興味をもつ「きっかけ作り」と、市内のタイルがある場所を示したマップによって、多治見の観光促進につなげたいと考えています。



「まちなかタイルフォトコンテスト」実施中!

地元の金融機関である東濃信用金庫が実施しています。東濃信用金庫も本年が創業100周年の年となり、現在までに共に手を取り合い頑張ってきました。



多くの皆さんと一緒に制作したい想いで、クラウドファンディング。タイルの魅力を感じ取っていただくきっかけづくりをお願いします。

「みんなのタイル図鑑」の内容詳細

本には「クラフトキット」として、タイルを同封いたします。表紙にタイルを貼り、ご自身のセンスで仕上げます。

お好みのタイルを購入・追加して、さらに素敵な図鑑に!

● コンテンツについて

- ① フォトコンテスト入賞作品×タイルの分類
- ② タイルマップ
- ③ 「タイルって何?」(定義・歴史・作り方)

出版完了予定日：2022年9月予定
委託事業者：READYFOR



タイル名称統一100周年記念事業 「みんなのタイル図鑑」制作プロジェクト

主催：多治見市美濃焼タイル振興協議会

協力：東濃信用金庫

推薦：古川雅典氏(多治見市長) / 藤森照信氏(建築家) / 鈴木ちなみ氏(モデル・タレント)

CROWDFUNDING お申し込みはこちらから

▶ readyfor.jp/projects/tile100

※プロジェクトの支援に進む際には、サイトへの登録・ログインをお願いいたします

